

漢字の意味基底から考える

戦前の「餌」という字の使用

——「食餌療法」の場合——

梅林 博人

一、はじめに

戦前に見られた「食餌療法」という表記は、「餌」という漢字が、「当用漢字表」（一九四六）および「常用漢字表」（一九八二）で表外漢字とされたことにより、戦後は、その表記を「食事療法」へと変えていった。

その変化の様子は、次に挙げる「《A》新聞データベース」による『見出し検索』調査^①の結果から見る事ができる。朝日新聞でも読売新聞でも、戦前は「食餌療法」が多く、戦後は「食事療法」が多いことが一目瞭然である。

《A》新聞データベースによる「見出し検索」調査^①

○朝日新聞記事データベース「開蔵Ⅱビジュアル」

「朝日新聞縮刷版 1879～1999」

戦前「食餌療法 29件・食事療法 0件」

〔件〕は記事・広告の数。昭和二〇年までが戦前

戦後「食餌療法 0件・食事療法 30件」

○読売新聞記事データベース「ヨミダス歴史館（明治・大正・昭和 1874～1989）」

戦前「食餌療法 48件・食事療法 2件」

戦後「食餌療法 2件・食事療法 59件」

また、こうした変化は、日常でも実感される。たとえば、本学附属図書館にある関連書籍名の表記が「食餌療法」（昭和四〇年代前半以前）から「食事療法」（昭和

四〇年代後半以降）へと変わってきていることや、調剤薬局に置いてある健康案内パンフレットなどでは軒並み「食事療法」と書かれているなどの例が挙げられる。

その後「餌」の字は、「改定常用漢字表」（二〇一〇）で表外漢字から表内漢字へと変わる。そのため、「食餌療法」という表記は、そこで一旦復活のチャンスが来るのであるが、しかし、結局、使用の増加へと転ずることなく、今日まで、「食事療法」優勢、「食餌療法」劣勢の状況が続いてきてしまっている。その様子は、次に挙げる「《B》『日経テレコン21』による新聞全国四紙の『記事検索』調査」の結果で確認することができる。

《B》「日経テレコン21」による新聞全国四紙の「記事検索」調査²⁾

○「食餌療法」と「食事療法」

「食餌療法」5件・「食事療法」1134件

（2008年1月1日～2018年1月1日）

このようにいつまでも代用字表記語「食事療法」の使用が続き、本来的とも考えられる「食餌療法」の使用が控えられる状況は、『国語に関する世論調査』（文化庁）

などから垣間見える、正しさを追求する世相からすれば自然なこととは言いがたい。

I、なぜ、代用字であるにもかかわらず、「事」の字は使われ続けるのか。

II、なぜ、表内漢字となったにもかかわらず、旧来の「餌」の字は選ばれないのか。

こうした疑問のうち、Iについては、拙稿（二〇一九）で次のようにまとめた。『食じ療法』の場合、その内実（指示される具体的な内容）が時代に応じて変化し、むしろ、代用字表記語「食事療法」の表記の方がその内実を表すのには適していると意識されるようになった結果、その受容（使用）が続いている」（三五ページ）。

すなわち、現在と同程度ではない、日本のかつての食糧事情の時代に、医療のために食べるモノの指導をしていた「食餌療法」と、飽食の時代に、治療のほか美容などにも関わって食べるコトを指導している「食事療法」とではもはや内実が異なっており、その実情を伝えるには「食事療法」と記す方がむしろ適している、それゆえ、その使用が続けられているという内容を述べた。

そこで、本稿では、もう一つの、「餌」の字が選ばれない理由について考え、併せて、その理由を述べるため

に解決しなければならぬ問題（その内容は後述）について考えてみることにしたい。

二、問題点の整理

二―一、「食餌療法」の側からの言及が必要な理由

既述のように、〈食事療法〉優勢、「食餌療法」劣勢という状況については拙稿（二〇一九）で「食事療法」の側から説明をしたので、それで事足りるとすることも可能かもしれないが、やはり、もう一方の「食餌療法」の側からの言及も必要であると考ええる。なぜなら、「食餌療法」には、新聞社等の用語集や国語辞典にその使用を容認する記述がありながら、それでもなお、使用が控えられるという実態があるからである。この点について、次の「《C》新聞社等の用語集および国語辞典の記述」を見つつ述べてみたい。

《C》新聞社等の用語集および国語辞典の記述（傍線は引用者による）

○「医療関係では『食餌療法』を使う場合もある」（時事通信社、毎日、読売、産経、共同通信社）

の用語集。共同通信社は冒頭部が「医療関係で」となっている）

○「一般表記では『食事療法』だが、『食餌療法』の表記を使う場合もある」（日経の用語集）

○『明鏡国語辞典』（第二版第一刷二〇一〇年大修館書店）

【食事】〔名〕①引用者略②食べ物。特に、病気の治療に役立てるものとしての食べ物。「―療法」「表記」「食餌」の代用表記。

○『岩波国語辞典』（第八版第一刷二〇一九年岩波書店）

【食事】〔名・ス自〕①引用者略②↓しょくじ（食餌）【食餌】〔医学〕（病気を治す材料として見た）たべもの。「―療法」（「食事療法」とも書く）

《C》の記述からわかるように、「食じ療法」における「餌」の字の使用は新聞業界では容認されている。また、国語辞典の記述では、文脈に応じた「食餌」の使用をむしろ推奨しているようにも見える。

高齢化が進む今日、新聞や雑誌では医療的な内容が扱われることは珍しくないし、既述のように、今では美容関係の記事でも「食じ療法」は使われる。その際、「改

定常用漢字表」で表内漢字となっている「餌」の字を選んで「食餌療法」と記しても、それは無謀なことではない。

したがって、新聞や雑誌が「餌」の字の積極的な使用にさえ踏み切れば、次の(1)のような用例がさらに増えてきても不思議ではない。

(1) 劇場の敷地内には、美味しいピザを出す店もある。とたまにこういうことを書くと、美食しているようであるが、普段は食餌療法をしていることもあり、質素である。(井沢満ブログ 2019-04-04 日記「我が子虐待の母に『毛皮のマリー』」、脚本家 <https://blog.goo.ne.jp/mannizawa/e/455bf3ad5ce2bbeb84bdcc50635517> 二〇二一年一月二七日現在。傍線引用者)

しかし、実際には、「食餌療法」の使用はあいかわらず低調であること、先掲《A》《B》のとおりである。

このように、使用可能な状況にありながら使われないという実態を見ると、「食じ療法」に関しては、「事」の字が選ばれるから「餌」の字は選ばれないといった間接

的な説明よりも、「餌」の字それ自体に使用が憚られる理由があるという直接的な説明を考えた方がよい。

二二、「餌」という字が使われない理由とそれにまつわる疑問

そこで、その使用が控えられる直接的な理由を考えてみると、それは、次の毎日新聞のコラムが書くように、「不快感を与える」といった、語の副次的意味にあると考えられる。

毎日新聞は99年5月から「餌」を「え」「えさ」と訓読みする場合は使っていますが、音読みの「ジ」も認めたらどうかという議論になりました。／「ジ」と読めるなら本来の「食餌療法」と書くべきだ。／いや、「食事療法」は定着している。餌では動物のエサのようで不快感を与える。「食事療法」そのものを新しい表記として認めてはどうか。(毎日新聞コラム「校閲インサイド『読めば読むほど(食事療法?・食餌療法?)』」二〇〇一年一〇月二三日29面。傍線は引用者)

「餌」の意味は、「①こなもち。だんご。②こながき。

③たべる。④たべもの。ゑじき。ゑさ。⑤利益。⑥ゑを
與へる。⑦よるこぼす。⑧食はれる。⑨このむ。⑩うる
はしい。⑪すぢ。」(諸橋轍次著『大漢和辞典』大修館書
店参照)とあり、先の用例(1)では「たべもの」の意
味で使われているが、その場合、「ゑじき」「ゑさ」「ゑを
與へる」という意味も連想されてしまうというのである。

これは、「治療のために、好きな『食事』を制限され
ている患者さんにとって、『食餌』はあまりにも味気な
い」(同コラム)という心情からすれば自然な発想であ
るし、また、本学を二〇一八年度に定年退職された栄養
学の一教授(「食事療法」も専門)からもこれと同趣旨
の話を聞いたことから、「餌」の字の使用を控える一理
由たり得ると思われる。何より、理由として単純明快で
ある。

しかし、この理由を掲げる場合には、〈戦前の「食餌
療法」には「えさ」の意味の影響はなかったのか〉とい
う疑問への解答が必須である。「一、はじめに」の末尾
で「解決しなければならぬ問題」と述べたものがこれ
で、この解決がなければ、「エサのようで不快感を与え
る」からという理由は説得力のない単なる印象論になっ

てしまう。

二―三、戦前の「餌」という字における「えさ」という 意味の存在

そこで考察を進めるために、まず、〈戦前の「餌」に
は「えさ」の意義が乏しかったのではないか〉という安
易な仮定を試みるのであるが、しかし、やはりそれは
あり得ないということが『日本国語大辞典』第二版(小
学館。以下『日国』二版と記す)の「餌(え)」「餌(え
さ)」の項目を見ることがすぐに明らかとなる。

『日国』二版の「餌(え)」の項目には、用例の出典
が「書記(720)」「十卷本和名抄(934頃)」「高野本平
家(136前)」「(以下略)と続き、語誌には「(1)上代から「動
物の食料」を意味するものとして広く用いられたが、中
世以降、「えば」が使われる事も少なくなかった。(2)江
戸中期には、①の意では「えさ」、③の意では「えじき」
が現われ、意味領域が分割され固定された。この結果、
多くの場合、「え」は、これらの語彙の文章語となったり、
複合語として残るなどした。」とある(傍線引用者)。ま
た、「餌(えさ)」の項目には、「え(餌)に同じ。」とあ
り、「雑俳・柳多留―一九(1784)」をはじめとする出典

が複数示されている。

こうした記述だけを見ても、戦前の「餌」の字に「えさ」の意義が乏しいということなどなかったと考えられる。

加えて、戦前の日常生活における鳥獣魚虫への餌やりもある。鵜飼、鷹匠、家畜、観賞用魚、養蚕業、養蜂業など、それらは今日よりもかつてのほうが身近であったと考えられ、そこには常に「えさ」がついて回ったはずである。

そのため、戦前の「食餌」の用例には、「餌」の字が「えさ」の意味で使われているものが確かにある。国立国語研究所の「中納言」による検索で得られた「食餌」の用例45例から該当する数例を以下に挙げる（検索対象「明治・大正」。内訳は、『女学雑誌』1例、『太陽』37例、『女学世界』4例、『婦人倶楽部』3例。引用に際し、ルビを一部省略し旧漢字を一部改めた。以下同様）。

- (2) 第二森林は塩類及食餌を魚族に給するものなり。（「森林と水流の關係」在農科大学 市島豊山『太陽』第七卷第一〇号、明治三四年）
- (3) （鵜は―補引用者）趾を以て土を掻きて食餌を求む、其食餌は多く昆虫なるを以て田畑山林の益鳥

として（「はなごよみ」（話題「鵜」）『女学世界』第九卷第五号 明治四二年）

(4) 第二 動物の生存と其食餌とにおける矛盾。

（法学博士文学博士男爵加藤弘之『太陽』第一五卷第六号、明治四二年）

(5) その入江には黒鯛が沢山居た。それは漁師達が沖から帰つて来て船を掃除するに、魚の餌屑えくづを棄てたり、女共が麦などを洗ひに来て流したりするので、自然に彼等にとって食餌しょくじが多いから朝夕は殊に多く群った。（引用者中略）またそれらは針で釣られることも殆どなかった。いかにうまさうな餌えさがあつても、それらは決して飛びついて食ふことはない。それらは極めて用心深く、餌えさそのものやその周囲を見廻す（「漁村賦」加能作次郎『太陽』第二十三卷第四号、大正六年）

(6) （女王蟻は―補引用者）そこへ若干の卵を産みつけると、やがて孵化した頼りない微細な幼虫に食餌しょくじを与える（「科学神話 蟻の戦争」橋爪生『太陽』第三十一卷第七号、大正一四年）

つまり、戦前において、「餌」の字は、(2) ～ (6)

のような文脈では「えさ」の意味で用いられ、次の(7)のような文脈では「たべもの」の意味で用いられていた。そのような文脈に応じた意味の選り分けが可能であったと考えられる。

(7) 今より約七十年前モーレシヨット氏は、食餌療法に關して次の様な言を為して居る。「思慮深き医師は殊に疾患の慢性である場合、薬剤療法を屢々廃止し得可きも、適切なる食餌療法は容易に之を放棄することは出来ない」と。當時に比し、真に隔世の進歩を遂げたる營養學は、今日に於ても尚ほ吾医療界の根底を成すもので、モ氏の斯の言は、當に食餌療法の真髓を穿ちたる至言であると謂はねばならぬ。(『晩近に於ける食餌療法の進歩』高田蒔『太陽』第三十一卷第一号、大正一四年)

一方これに対して、戦後においては、「餌」の字に「たべもの」の意味を見ることができなくなり、「えさ」ばかりを連想してしまふようになったと考えられる。

このように、「餌」の字が有する「たべもの」の意味を喚起する・喚起しないといった事態について、合理的

な説明が必要となるのである。

三、漢字の意味基底

「食餌療法」に「えさ」の意味がつきまとうと考えがちな今日の私たちにとっては、「えさ」の連想をせずに「餌」の字を用いるということは奇妙に思われるかもしれない。しかし、じつは私たちは日ごろ、そのような行為を経験済みである。たとえば、「空駐車場」の看板を見て、子供のように「空(そら)の駐車場?」という疑問を持つことはない。また、「妙なる樂の音」(『岩波国語辞典』第八版「妙(たえ)」の用例)などの雅語的表現に接した時に、「みょうな音」とは考えない。こうした例と同様である。

漢語におけるこのような意味の選り分けについては、林四郎(一九九五)が「意味基底」という術語をもって論及している。以下に引用をして、その主旨を見てみたい。

訓は意味なのだから、その字を音で読んでいる場合にも、意味指示作用としては、訓が使用者の心の

中で働いている。例えば、「山」の音はサン、訓は「やま」だから、山野はサンヤで、意味を「やまや野原」と理解する。山頂はサンチョウで、意味が「やまの頂上」、登山はトザンで、意味が「やまに登る」である。こういう「山」の字では、音が一つ、訓が一つで、訓が意味基底として働いている。(中略)／「落」の訓は「おちる」「おとす」で、落下、落選、転落、墜落など、この字を含む漢語の多くが、これらの訓を意味基底として成り立っている。しかし、集落、村落、部落、群落などの言葉では「おちる」も「おとす」も関係なく、落の意味基底になる簡単な言葉が見つけにくい。しばらく考えて、人や動植物の集まりを意味するらしいと理解する。(中略)。「平」「衣」「化」についての解説を割愛)／日本漢字の訓には、現代漢語の意味基底として、以前と変らずよく働くものもあり、働きが制限されているものもあり、またほとんど働かなくなったものもあるということが、以上の例でわかる。そのことから、漢字の訓は、その働き、価値づけなどが、時代とともに絶えず変るものだということもわかるのである。／従って、訓が二つ以上あれば、そのうち

のどれかが意味基底として劣勢になることがある。(一三三～一三四ページ)。「やま」以外の傍線、中略、割愛は引用者による)

四、「食餌療法」における「餌」という字の使用

林氏の「意味基底」に従って、戦前・戦後の「食じ療法」における「餌」という字の使用を考えてみると、次のようになるだろう。

戦前の「餌」の字には「たべもの」「えさ」の二つの優勢な意味基底があり、文脈に応じてそれぞれが働いていた。「療法」との結合によつて、瞬時に医療的で専門的な語であることがわかる「食餌療法」は意味基底「たべもの」が発動する例で、その場合、もう一つの意味基底である「えさ」は発動せず、いわば眠っている状態となる。そのため、「食餌療法」に「えさ」の意味がつきまとうことは起きにくかったと考えられる。

このような「食餌療法」という用例のほか、次のような「食餌」の用例の場合も、文脈的に意味基底「たべもの」が働き、意味基底「えさ」は働かなかつたと考えられる。

(8) 女子教育の必要如何を論ずるは、既に愚なり。

医薬食餌しよくじの男子に必要なと共に、女子にも必要なるが如く、男子に欠くべからざる教育は、女子にも欠くべからざるものなり。(「女子教育家に告ぐ」 鷗村生『女学雑誌』第三八八号、明治二七年)

(9) (小野蘭山先生は―補引用者) 平日交友なく、六畳の座敷に独座ひとりざして観書抄録を努めたり、食餌は三度づ、膳碗と飯櫃とを具して座敷の中へ入れ置き、襖を立切り置なり、(「東洋博物学の泰斗小野蘭山先生の百年記念展覧会に就て」『太陽』第一五巻第一号、明治四二年)

(10) さて日本の思想界に与へたる帝国大学の影響は如何。日本人民は帝国大学より如何なる心の食餌を提供せられつゝあるや。(「日本の思想界に於ける帝国大学」山路愛山『太陽』第一五巻第六号、明治四二年)

(11) 従てギブスで一定日数の間固定して置き一方体の栄養を良くする様に食餌に注意することが必要です。(「育児相談 ○脊椎カリエス」医学博士島信『婦人倶楽部』第六卷第一二号、大正一四年)

一方、戦後においては、「当用漢字表」の影響から「食餌療法」が「食事療法」へと用字を変えたために、「餌」の字が意味基底「たべもの」を発動する典型的な例を失うことになる。その結果、意味基底「たべもの」の発動する機会がそれ以前よりも減り、ついにはその意味基底が劣勢となり、「餌」の字において意味基底「えさ」だけが優勢になる。そのため、「餌」という字を含む語では、常に「えさ」の意味が発動してしまい、結果、不快感を生ずるようになってしまった。このように考えられるのである。

五、おわりに

以上、今日の「食じ療法」の表記において「餌」という字が選ばれない理由と、それにまつわる戦前の「食餌療法」における「餌」の字の意味について考えた。

結論をまとめれば、戦前と戦後では「餌」の字の意味基底が変わってしまい(戦前は「たべもの」「えさ」の二つ、戦後は「えさ」のみ)、そのため、戦後の「食餌療法」は、「えさ」の意味が目立って不快感を生じやすくなり、その使用が控えられるようになった、となる。

したがって、今後「食餌療法」が再び常用されるようになるためには、「餌」の字において意味基底「たべもの」が働くようになることが不可欠で、それなしには使用の活性化はおぼつかないであろう。「改定常用漢字表」で表外漢字が表内漢字に戻っても、変容してしまった漢字の意味基底とその発動の仕組みが戻らないと、使用状況は変わらない場合がある。「食餌療法」はその一例であった。

「当用漢字表」や「常用漢字表」は用字に影響を与えるものと考えられがちであるが、そののみならず、漢字の意味基底にも影響を及ぼすのである。(丁)

【注】

(1) 《A》は、筆者が各新聞データベースで、「食餌療法」「食事療法」を検索語として「見出し検索」をし、その後、紙面を確認して得られた使用状況である。「見出し検索」とは、データベースで「キーワード」や「分類」を含めない「見出し」のみを検索対象として指定する方法である。見出しのついた各記事・広告には検索語「食餌療法」

「食事療法」が複数回現れることから、各語の延べ語数は、本文中で結果として示した件数の数字よりも多いことになる。広告は、同内容でも日時が異なっていれば各々数えあげた。たとえば昨日今日で同じ広告が出た場合は2件となる。なお、「ヨミダス歴史館」では、次のような対象外資料も抽出されることから、検索初期数値は異なったものが出る。その値を掲載面で実態を確認し修正した値が本文の数値である。

○検索語「食餌療法」で抽出される対象外資料の見出しと掲載面の実態(矢印の先)

・一九〇五・三・七朝刊「隣の噂(中略) 食餌療法」↓その主旨ながら検索語なし。

・一九三三・一〇・四朝刊「無塩食餌療法」↓「無塩食治療法」(誤植。次回では「食餌」)

・一九六五・一一・一五朝刊「日本式食餌療法」↓見出し「食ジ」、本文「食じ」と交ぜ書き。

○検索語「食事療法」で抽出される対象外資料の見出しと掲載面の実態(矢印の先)

・一八七九・一二・三朝刊「食事療法を指示」↓その主旨ながら検索語なし。

・一九二一・一一・三〇朝刊「広告・痔疾食事療法」↓検索語なし。本文に「食養療法」

・一九二七・三・一七朝刊「色々の食事療法」↓「食餌療法」(「食餌療法」のデータとして編入した)

(2) 《B》は、筆者がデータベース「日経テレコン21」で朝日、読売、毎日、産経の四紙について、「食餌療法」「食事療法」を検索語として「記事検索」を行って得られた使用状況である(使用規定により相模女子大学附属図書館員による代行検索)。毎日新聞のコラム「校閲インサイド」『読めば読むほど(食事療法?食餌療法?)』(二〇〇一年一〇月二三日29面)の全文は以下の通りである。

糖尿病や腎臓病などの治療の一環に「しょくじ療法」があります。昔は「食餌療法」と書きましたが、「餌」が常用漢字にないため、新聞は「食事療法」と書くのがルールになっています。／毎日新聞は99年5月から「餌」を「え」「えさ」と訓読みする場合は使っていますが、音読みの「ジ」も認めたらどうかという議論になりました。／「ジ」と読めるなら本来の「食餌療法」と書くべ

きだ。／いや、「食事療法」は定着している。餌では動物のエサのようで不快感を与える。「食事療法」そのものを新しい表記として認めてはどうか。／頼りの国語辞典は、と手近の10種ほどを見ると「食餌療法」が圧倒的に多数派で、両者併記が2種。「食事療法」のみは皆無でした。でも強い味方を見つけました。「医学大辞典」(南山堂)、「最新家庭の医学」(時事通信社)がともに「食事療法」を採用しているのです。／もともと「食餌」は「食べ物」のことで、人にも動物にも区別しないで使われていたようです。でも、治療のために、好きな「食事」を制限されている患者さんにとって、「食餌」はあまりにも味気ない文字づかいではないでしょうか。「食餌」と「食事」を区別して使う理由も見当たりません。「食事療法」が、国語辞典でも多数派になる日は近いと確信しています。【松崎仁紀】

【参考文献】

伊坂淳一(二〇一六)『新ここから始まる日本語学』
ひつじ書房

梅林博人・島田泰子・鳴海伸一・新野直哉・橋本行洋
(二〇一八)『代用字表記語』の受容と語義変化―
『食餌(事)療法』を例として― 日本語学会春季
大会予稿集

梅林博人(二〇一九)『代用字表記語』の受容と語義
変化―『食餌/食事療法』を例として―『相
模国文』第四六号 相模女子大学国文研究会

鳴海伸一(二〇一九)『蒐集』『収集』の意味分化と『コ
レクション』―『代用字表記語』の受容の一例とし
て―『国語語彙史の研究』三十八 国語語彙史研
究会

林四郎(一九八一)『漢語基底語考』『文芸言語研究言
語篇』五 筑波大学文芸・言語学系

林四郎(一九九五)『音と訓と意味基底をめぐって』『日
本の漢字・中国の漢字』三省堂(一三二)―一三五
ページ)

〈新聞社等の用語集〉

毎日新聞社編(二〇一五)『POD版』毎日新聞用語
集

日本経済新聞社編(二〇一六年)『NIKKEI用語
の手引 2017年版』

読売新聞社編著(二〇一七)『読売新聞 用字用語の
手引 第5版』

朝日新聞社用語幹事編(二〇一五)『朝日新聞の用語
の手引「新版」』

日本新聞協会(二〇〇七)『新聞用語集 2007年
版』

時事通信社編著(二〇一六)『最新 用字用語ブック
[第7版]』

産経新聞社(二〇一二)『産経ハンドブック 平成24年
版』

共同通信社編(二〇一六)『記者ハンドブック 第13版
新聞用字用語集』

【付記】

本稿は、第一二回国語語彙史研究会(平成三十一年四月
二七日)で「漢語における意味基底の変化―『食餌療
法』を例に―」と題して口頭発表した際の原稿をもとに
して新たに稿を成したものである。発表当日の質疑応答
では貴重な御教示を賜った。記してお礼を申し上げます
とともに、その御教示を十分に反映できていない点につい
てはお詫び申し上げます。また、新聞社等の用語集につ

いては、日本経済新聞社の小林肇氏に資料とご教示をいただいた。国立国語研究所の「中納言」による検索については、国立国語研究所の間淵洋子氏にご教示いただいた。朝日新聞記事データベース、読売新聞記事データベース、日経テレコン21を利用しての調査については、相模女子大学附属図書館レファレンスにお世話になった。以上についても記して御礼を申し上げます。なお、用例検索には国立国語研究所のオンライン検索ツール「中納言」を用いて『日本語歴史コーパス 明治・大正編』も使用したので、ホームページの「ご利用にあたって」の指示に従い以下を記す。国立国語研究所(2019)『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』(短単位データ 1.2) https://pj.ninjalac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisyo.html#zasshi

(本学教授)